

待遇表現指導に関する試論

—上級者用シラバスの構築に向けて—

小川 誉子美

1. 待遇表現指導の問題点

日本語教育で取り上げられる項目の中で、敬語を中心とした待遇表現は、上級学習者には重要な項目として認識されているが、教授者にとっては、扱い方において、他の項目とは異なる困難さが伴う。まず、取り上げるべき項目は無数にあるが、教室で扱える項目が明確に整理されていないということ、他の文法項目と異なり、文法研究の成果が主たる拠り所となりえず、それ以外の視点をどの程度持ち込むかその拠り所が乏しいという点などがその根拠としてあげられよう。

一方、学習者にとっては、インターンシップや就職のための面接をはじめ、日本語力を生かした社会参加の機会が増え、面接を控えた時期になると、必ず学習要望の出る項目であるが、上級になっても、依然習得困難な項目の一つに数えられている。

本稿は、敬語のみでなく、聞き手への配慮をあらわす表現を待遇表現として扱い、日本語教育で日々遭遇する問題を取り上げながら、上級者に必要な学習項目を中心に、指導のあり方について、試論を展開するものである。

2. 従来の指導の流れ

初級教科書における敬語の導入時期には、ある特徴が見られる。それは、基本文型の習得をめざす教科書では、最終課で紹介されるが、会話能力の養成をめざす教科書では、初期段階から気付きを促がす試みがなされ、敬語の導入もより早い段階で行われるという、アプローチの違いによって傾向が異なるというものである。例えば、『新しい日本語』(1973年 大阪外国語大学)は、全30課中30課で、『日本語初歩』(1981年 国際交流基金)は、全34課中33課で紹介され、話し言葉として普通体とともに導入されている。これに対し、"Situational Functional Japanese" (1991~1992年 筑波大学ランゲージグループ)では、全24課中9課で紹介され、モデル会話文中の待遇的要素については、既に3課で解説がある。また、"A Course in Modern Japanese" (2002年 名古屋大学日本語教育研究グループ)は、全20課中16課で導入され、モデル会話文中の待遇的な要素については、2課で解説されている¹⁾。日本語教育の中心が、言語構造から運用能力の習得に移行し、会話表現に不可欠な待遇表現の導入の段階が早まり、学習者の触れる機会が増えると、重要性に対する認識も変わると思われる。

中級レベルになると、話し言葉の音声的な変化にも注意が向けられ、初級では理解にとどめられていた普通体の会話を志向しはじめる。しかし、この段階では、学習の中心が、

読解力の向上や書き言葉表現の習得に比重が傾き、会話を中心に扱う総合教材や会話用教科書も相対的に激減する。この段階の会話教材の多くは、機能シラバスを組み、スピーチレベルを意識させる中、特にフォーマルな場面を重視し、豊富なモデル会話が提示されている²⁾。さらに学習段階が進むと、丁寧さに関しても運用面での使い分けが要求され、日本語力が上がるにつれ、待遇表現の違反が目立つようになる。

これまでのところ、中級以降において、フォーマルな会話の紹介は一部にはあるものの、より広い待遇の概念に注目をさせ、その視点から体系的に会話表現を見直したり、初級の段階ではさまざまに扱われてきた敬語について発展的に整理をするということは少ない。また、多くの場合、敬語が使われる場面はあらかじめ設定され、その中で言語形式をかえるという練習を行うものであり、待遇レベルの判断を決定する場が提供されているとはいえない。

3. 待遇レベルの判断基準

前節で見たような状況が生じる要因は何であろうか。敬語の難しさは、そのシステムにあるのではなく、人間関係や場面の把握であると言われている。そこにルールを持ち出すことの危険性から、教科書では扱う範囲がかぎられてしまい、前節で見たような問題点が残され、あとは教授者にまかされるということになっているのであろう。

現実には、各場面における待遇レベルの判断には、多くの要因が関わり、言語形式に関する情報だけでは不十分である。学習者にとって、言語形式とともに、待遇レベルがどのような基準で選択されるかという点が明確に示される必要がある。

本節では、待遇レベル判断に対する学習者のとまどいの例から、必要な指導内容について提案する。

「丁寧度の低い話し方は、親しみがもたれやすいという利点がある反面、非常に危険な場合があることをよく教えておきたい」(立松 1989: 44)

という慎重な配慮のもと、初級で導入される話し方の丁寧さのレベルは、普通体ではなく丁寧体が選択されてきた。敬語や普通体が導入されると、これらの形式の選択に関し、具体的に、「教師と生徒」「初対面の相手と親しい友人」「大勢の前と個人的な会話」といった場面を示し、「上下」「親疎」などの基準が重要な要素として認識される。

対人行動をコントロールする原理は、日本語研究の分野で従来使われてきた概念に従うと、「ウチ・ソト」「上・下」「親・疎」「恩恵・非恩恵」など、また、ポライトネス理論の概念に従うと「社会的距離」「親疎関係」「場面や話題のあらたまり度」「相手の負担度」という要因によると説明される。

しかし、日本語教育で応用する場合、これらの概念は、社会的・文化的慣習に依拠する

ものが多く、具体的な例がないと正確には伝わりにくい。さらに、これらの要因は、単独に典型的な形で存在するとは限らず共存することが多い。複数の要因が共存するとき、何が優先されて待遇レベルが判断されるのかという説明が必要となる。例えば、「上」の人に「親」しみを示したいとき、「上」の人を「ソト」の人に対して「ウチ」扱いしたいとき、待遇レベルはどのように判断するかといった、上級学習者の疑問に答える必要がある。実際の運用において、こうした要因が共存する場面で、待遇形式の不適切な選択によって、聞き手らに居心地の悪さや不快感を与えるケースがある。以下、窪田（1992：69-70）（1. 2）と、筆者の学生が遭遇した例（3）を参考にまとめ、考察の資料とする。

1. あるアメリカ人社員が、日本での取引の効果をあげるために、取引相手の社長と早く仲良くなるのが大切だと考え、自国の発想から親愛の情を示すにはくだけた言葉遣いが必要だと思い、英語をもとにしたかなり下品な直訳日本語で話しかけ、相手の社長をひどく不愉快にさせてしまった。
2. オーストラリア人留学生がある酒の席で、普段から親愛感を抱いており、その場でますます親しくなっていた教師と、友達言葉で話していたが、その場に教師の奥さんがあらわれると「(家内) が来たよ」と言って、周囲を苦笑させた。
3. 韓国人留学生が、指導教官が不在の研究室にいと、知らない先生から指導教官の居所を聞かれたので、以前、アルバイト先でやっていたように「ウチ・ソト」のルールに従い、先生をつけず、「○○は、ありません。もどりましたら、連絡させましょうか」と言ったが、その先生は戸惑いの表情を見せた。

1. 2. は、上位の相手に対して、丁寧さを維持しながら、親しさを表したいときの待遇レベルの判断に関する問題である。3. は、学校における慣習が他の集団のそれと異なることがあるという社会慣習に関する問題である。慣習についての知識がないと、店員との会話、子供やセールスマン、看護婦との会話など、母語における慣習が持ち込まれやすいので、早い段階で例を提示しておくことが必要であろう。特に、学習者は、親しくなった相手に普通体を使う傾向があるが、1. 2. の例に見るように、上位の相手に対しても、親しさをあらわしたいとき、すべてを普通体にし、上位者と同じストラテジーを取ることが多い。この点に関し、鈴木（1997）は、

「上位の相手が普通体で話しはじめても、普通体に切り替えることはできない。(中略) 日本語の場合には、家族間や親族間の一部を除いて、教師対学生、ホームステイのホスト対学生のような場合、非常に親しい間柄であっても、学習者が普通体に切り替えることは難しい。」

と述べ、立場的にも年齢的にも上下関係にある日本語母語話者二人の間の、一見、普通体と丁寧体が無秩序に混在するかのように見える会話を観察し、下の立場にある話者の待遇レベルについて、次のように述べる。

「一見、文末だけ見ると、普通体のほうが多いように見える。(中略) 丁寧さに関して何の配慮もなく普通体になっているのではない。普通体になっているのは、〈話し手の領域〉〈中立の領域〉について述べている部分に限られており、謝辞・質問・依頼など聞き手を目当てとした発話はすべて丁寧体を維持している。しかも、聞き手の動作に言及する部分は敬語が使われている。(中略) ひとつひとつの発話レベルでは普通体から会話体に変まっているように見えるが、全体の談話レベルでは、〈聞き手の領域〉に踏み込むことを回避するという、丁寧体世界の規範に従っており、制限の弱い部分に限って普通体を使用しているということが出来る。」(傍点筆者)

ここでいう、丁寧体世界の規範とは、次のようである。丁寧体の世界では、話題に関して「話し手の領域」「聞き手の領域」が区別されており、普通体世界では可能だが、「聞き手の領域」へ安易に踏み込めないこと、さらにこの領域には、「私的」性の強さに階層があり、弱い階層に属する話題(例えば所有物など)に対してなら、普通体世界の規範を持ち込めるといふ。

学習者には、上位者との会話で普通体を使う際、聞き手に対する問いかけは、丁寧体が維持されるということとともに、話題によって待遇意識が必要であるという点(1は、最も「私的」性の高い家族であったにもかかわらず「来たよ」と普通体が使われた)にも注意を向けさせたい。また、上位者との会話における話題のルールは、「話題のあらたまり度」(井出)とも共通する。普通体の会話の中で丁寧体が使われる現象を観察した結果、「話題のあらたまり度」と待遇レベルとの関わりが指摘されているが、「聞き手の領域」の私的な話題や、「話題のあらたまり度」といった概念も、2.に見られるような不適切な普通体使用回避のための説明に有効な手段であると思われる。待遇レベルの決定要因を探る実証的なデータが、異なるジャンルの談話に関し報告されつつある³⁾。

4. 語用論上の課題

日本語の語用論上の特徴は、場面や機能に着目した豊富な会話練習の中で、認識されはじめる。こうした練習は、誤用を未然に防ぐ一手段でもあろう。

語用論上の誤用は、いくら相手に対する配慮があったとしても、意図が伝わらず、逆にその場の雰囲気や損ねてしまったり、発話者のパーソナリティに関わるような印象を与えかねないという点で、深刻なものともみられている。熊井(1989)は、主として英語話者の発話に見られる「先生、いつ私の作文をご覧になりたいですか」「先生もこの映画をご覧

になりたいですか」という二つの文の容認度の違いについて、「ほしい・たい」を使って相手にたずねる場合には、二つのルールがあるとし、次のように説明する。両者とも、上位に待遇する相手に対して、希望願望をたずねることはできないというルールに違反し、前者は、さらに話し手の利益になることにこの表現を使用しているからだという。

また、日本語では、上位者に対して、聞き手の利益になることであっても依頼の表現をとるストラテジーが使われやすいという指摘があるが、こうした個々の表現の待遇的意味に注意したり、それぞれの会話機能で使われるストラテジーを丁寧さが求められる場面を中心に機能別に見ていくという方法は、前述の会話教材でも取り上げられ、豊富な会話例が示されている。

語用論ルールは、それぞれの言語や文化の間で異なる特徴を示す。学習者の文化背景等によって、日本語の語用論ルールの問題となるところが異なる。一例をあげると、井出他(1986)は、ポライトネスの原則に基づいた言語行動のストラテジーには性格の異なる次の二つの方法があり、日本人とアメリカ人ではその方法に異なる特徴があると述べる。社会的距離、親疎関係、場面や話題のあらたまり度、相手への負担度に応じて、社会・文化の慣習に従ってとる敬語行動「わきまえ方式」と、積極的に相手に敬意や親しみ表現する敬語行動「働きかけ方式」を区別して考えた場合、日本人はアメリカ人に比べ「わきまえ方式」をとることが多いと言う。

学習者の文化背景により重視すべき点が異なり、こうした視点から教材作りをめざす場合、学習者の言語圏における語用論に関する具体的なデータが必要となる。

5. 統語面の課題

書店には、日本人の敬語の乱れをテーマとした書物が並び、強い関心が持たれている。母語話者に見られる乱れとは、謙譲語や丁寧語や尊敬語の取り違えなど、語彙や文法面におけるものが多く、一部の乱れについては、謙譲語が丁寧語化していく過程としてとらえているものもある。学習者にとっては、待遇レベルの判断に関わるのではなく、構造上の問題でルールが提示されれば、乗り越えられない難問ではないし、また、この範囲の非用や誤用が深刻な誤解を生じるということはないだろう。

日本語教育での問題は、かつては乱れとして扱われていたが、今では一部で定着したかに見える敬語の使い方を、どのように扱うかということである。例えば、最近耳にする敬語の中に、謙譲語「おる」に尊敬語「られる」がついた「おられる」がある。これは、原理から見れば矛盾するものであるが、抵抗なく使われているかに見える。また、本来、許可を受けて行うことを述べる「させていただく」は、謙譲語や丁寧語として、かなりの勢いで広がっている。これには、「許可を受けていないのにあたかも許可を得て行っているように表現している」として不快感を示す意見も目立つ。上級学習者の中にも、「させていただく」を謙譲語として頻繁に使う者も多い。規範的ではないとされる運用例を扱う

に際し、学習者は、乱れとして扱われている言い方をそのまま受入れている場合が多いが、不快感を示す意見があることも示す必要があろう。

また、3節でみた丁寧体と普通体の使い分けには、「上下」等の待遇要素による判断ではなく別のルールで行われているものがある。同一話者の一つの談話の中における丁寧体と普通体の使い分けには、聞き手に向けられた発話かひとりごとか、また、大勢に対する問いかけか個人に対してのものかによって行われるものもある。また、あらたまった場面で使われる「韓国からまいりましたキムです」など、丁寧化した補文も、一定の制約の範囲で行われ、統語規則の範囲で示せるものである。

6. 上級者への待遇表現指導に向けて

敬語は、日本語母語話者でも、人生の中で習得が遅く、社会人になってからはじめて要求されることが多い。敬語の問題は、言葉の乱れとして扱われるように、日本人にも困難なものであるが、学習者にはどの程度要求するのかという惑いを聞くことがある。

日本語教育において、敬語へのアプローチの方法は、教師の敬語観と密接な関係がある。敬語観に関し、窪田（1992）は相反する二つの考えを示す。一つは、敬語は、礼儀として使うもので相互に尊敬しあうという意味よりも、相互に人格を認めあうとか相互に礼儀正しくするという意味のほうに解釈するというものがある。これに対し、敬語は、単なるエチケットといったレベルを超えたダイナミックな行動論と積極的に関わっているもので、それが日本文化の繁栄を支える原動力になっているという考えを紹介し、次のように述べる。

「宮地氏の考え方（礼儀としてとらえるという考え方）では、最低限守らなければならない表現はなにか、の追求が重視されることになろうし、複雑な敬語表現は要求しない立場にたつことになろう。一方、荒木氏の考え方（単なるエチケットや形式的な礼儀といったレベルを超えたダイナミックな行動論）に立てば、日本人の敬語的行動様式を重視して、日本人らしさや、比較的高度な敬語表現の使用も要求することになるかもしれない。両氏の差は、当然、敬語的随伴行動、非言語行動の重視のしかたにも関わる。」
（窪田 前掲：92）

この点、学習者はどうとらえているのであろうか。教師が受ける質問の多くが、ある場面で日本語話者はこういうときどう言うのかという、自己が遭遇する特定の場面における具体的な表現例に関することが多い。学習者は、自分の職務における重要な場面では、高度な知識と待遇上のマナーを身につけたいという意向を持つ者が圧倒的に多いと推測される。それでは、こうした要求にはどのように応じればいいのか。

話し言葉は、地域、場面、話し手の年齢や職業など様々な要因によって変化するが、待

遇表現は、さらに、非言語的要素や随伴行動、また、聞き手や話題の人物との関係だけでなく、脇の聞き手の存在の有無といった要素にも左右される。無数にある場面を抽出し一般化するのは困難なことであるし、対人関係を一般化することは学習者にとって危険でもある。学習者は、一つの状況を他にもあてはめ一般化し、適用する傾向がある。待遇表現の運用例を教科書で取りあげることがためられる理由は、これを危惧してのことでもあった。前述の会話テキストは、ビジネス日本語やキャンパス日本語を広く丁寧に扱っているが、今後、これにさらなる場面の追加や細分化がされることによって、多様な対人的人間関係の枠組み提示が可能になり、こうした危惧も不要なものとなろう。

上級者の待遇表現指導をどちらの考え方で行うかにより項目の取り上げ方は異なるが、取り上げる主要なテーマは、次のものであろう。

1. 敬語体系の発展的提示
2. 待遇レベルの判断基準の提示
3. 目的・場面別、(対人関係・母語別) 会話例の網羅的提示

特に、2. 3に関しては、具体的なデータがそろい、適切な形で日本語教育に応用されるのがのぞましい。応用にあたり、本稿で論じた点以外にも、待遇使用の聞き手側からの評価という視点も、シラバス構築への参考となろう。

7. まとめ

学習者の使用する待遇表現に関する許容度は人により異なる。非母語話者には使い分けは求めないという人が、「妻は、来ないのですか」「あなたもバザーを手伝いたいですか」とたずねられて、戸惑ったという報告を聞くと、待遇表現に関し外国人に寛容な意見の中には、自分が当事者にならないという前提があり、不適切な使用によって低い評価が下されてしまうことになる当事者に対し、無関心な立場から発せられるものもあると判断せざるをえない。

敬語を中心とした待遇表現とは「目的を達成するには、とにかくここで丁寧にいえばいい、謝っておけばいいといったテクニックを学ぶものだ」という認識をさせてしまったり、「敬語は人間の平等の原理をおかす封建社会の遺物だ」「モデル会話のように話す则自分のアイデンティティが変わってしまうような気がする」という意見が出るような場合は、敬語へのアプローチの方法や学習者の背景を再考する必要がある。

日本語が上達するに従って、対人関係の幅が広がる中、学習者の敬語不安を取り除くためにも、敬語を中心とした待遇表現は、知っておくと有意義なものであり、さらに円滑なコミュニケーションがはかれるという確信をもたせられるような提示でありたい。

注

1. 『初級日本語』(1994年 東京外国語大学)、『みんなの日本語』(1998年 スリー A ネットワーク)においても同様、最後の課で紹介される。また、会話場面を重視した『新文化初級日本語』(2002年 文化外国語専門学校)は、全36課中30課にまとめて提出され、11課から待遇的な表現が紹介される。会話文中の待遇要素とは、美化語の「お(ご)」、「いらっしゃる」などの動詞について解説されている。
2. 『Formal expressions for Japanese interaction 待遇表現』(1991) アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター編 ジャパンタイムズ、『現代日本語コース中級 I、II』(1988,1990) 名古屋大学日本語教育研究グループ編 名古屋大学出版会、『日本語でビジネス会話—中級編—』(1987) 日米会話学院凡人社など。
3. 『対話における待遇レベル管理の実証的研究 科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 課題番号 09834005 研究成果報告書』(2001) 三牧陽子など。

参考文献

- アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター編 (1991) 『Formal expressions for Japanese interaction 待遇表現 教師用マニュアル』 ジャパンタイムズ
- 井出祥子他 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動』 南雲堂
- 井出祥子 (1999) 「敬語は何をするものか—敬語のダイナミックな働き」 『日本語学』 第18巻9号 明治書院
- 窪田富雄 (1990) 『敬語教育の基本問題』 (上) 国立国語研究所
- 窪田富雄 (1992) 『敬語教育の基本問題』 (下) 国立国語研究所
- 熊井浩子 (1989) 「待遇表現指導の一視点—「ほしい」「たい」を中心にして—」 『日本語学校論集』 16 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 鈴木睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体と普通体」 『視点と言語行動』 くろしお出版
- 立松喜久子 (1989) 「外国人学習者の待遇表現レベルの適正さについて」 『日本語教育』 69
- 野田尚史 (1998) 「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」 『国語学』 194 国語学会